

大学新入生の持つ心理学知識

- 人間科学部人間科学科新入生の場合 -

丹治 哲雄・木島 恒一・山下 雅子・飯澤 未来

(文教大学人間科学部)

Misconceptions about Modern Psychology among First-year University Students in Human Science

TAJIMI TETSUO, KIJIMA TSUNEKAZU, YAMASHITA MASAKO, IIZAWA MIKI

(Faculty of Human Science, Bunkyo University)

要旨

本学人間科学部人間科学科の新入生の間に、現代心理学に関する知識がどの程度浸透しているのか、また、浸透している知識はどのような内容の知識なのかを概観するために、「心理学概論」開始の冒頭に行われた40問の心理学クイズの回答結果を分析した。併せて同時期に実施した通信教育制大学のA大学学生たちとの結果と比較した。探索的な分析ではあったが、文教大学新入生の持つ心理学知識の程度と、その特徴をある程度知ることができた。

・緒言

筆者の一人である丹治は、ここ6年間、本学人間科学部開設科目である「心理学概論」の講義を担当している。この概論科目は人間科学部の学部共通専門科目の一つであり、また、春学期(4月-7月)開講の講義のため、大学教育としての心理学に触れるのが初めてという人間科学部人間科学科1年生が受講生の圧倒的多数を占める。半期約12回の「心理学概論」を終えた段階で受講生の感想を聞いてみると、「この『心理学概論』の内容は、今まで自分が抱いていた心理学のイメージとは大きく違っていた」、「この『心理学概論』を受講したことで、心理学に対する見方が大きく変わった」という感想を述べる受講生が少なからず存在する。受講生の多数は、受講半月前までは高校生(あるいは「浪人」)であり、高校には正規教科としての「心理学」

は存在せず、彼らが正規の教育の場で心理学に触れる機会はほとんど無かったといっても過言ではないのであろう。また、それに反して、TVや雑誌などのマスメディアには通俗心理学の情報が溢れている。「大学の『心理学概論』では、雑誌などに掲載されているような占い風の『心理テスト』をやるものだとばかり思っていたが、そうではなかった」と感想を述べる受講生もいるほどである。大学新入生に対して適切な心理学の入門教育を行っていくために、講義担当者としては心理学教育を受ける前の大学新入生たちの間に、現代心理学に関する正しい知識がどの程度浸透しているのか、また、浸透している知識はどのような内容の知識なのかをある程度知っておく必要があるだろう。

丹治は、担当する「心理学概論」の第一回目の冒頭に、受講生に対して × で回答する

心理学知識に関する簡単なクイズを実施している。40問の短文からなるこのクイズは、その多くが日常一般的な知識とは異なる心理学的内容を述べた短文から構成されている。筆者らはこれを「『常識』心理学クイズ」と呼称している。このクイズを講義の第一回目の冒頭を実施する主たるねらいは、受講生に対して、これから半期約12回行われる「心理学概論」への興味を抱かせ、この講義への参加の動機づけを高めるところにある。ただ、このクイズの結果は、大雑把ではあっても、心理学教育を受ける前の大学新生たちの間に現代心理学に関する正しい知識がどの程度浸透しているのかをあらわしているとも考えられる。

ここでは、2003年度の4月に本学人間科学部人間科学科新生に対して行われた「『常識』心理学クイズ」の結果について、同時期に実施した通信教育制大学のA大学学生の結果と比較し報告する。A大学学生は、その多くが社会人であり、本学人間科学科新生よりも学歴や年齢の高い学生群である。さらに、それまでに何科目かの心理学関連科目を受講している学生も多く、本学の新生とは社会経験等による知識量が異なることが考えられる。ここでは、そうした学生群との比較を通して本学人間科学部新生の持つ心理学知識について探索的に概観してみることとした。

2. 方法

2.1 「常識」心理学クイズの構成

この「常識」心理学クイズは、40問の短文の正誤を×形式で問うもので、例えば「教師の生徒に対する期待と、その生徒の学力とは無関係である」、「心理学とは、フロイトの創始した精神分析学とほぼおなじものである」などの心理学に関連する40の短文から構成されている。心理学に関連するこの40問の短文は、McKeachie (1960)、Vaughan (1977)、稲葉 (1991) などが作成した短文と、丹治が

任意に作成した短文から構成されている。McKeachie、Vaughanの作成した短文の訳文は、一部、Zimbardo (1980) の古畑・平井監訳による翻訳書 (1983) に依っている。このクイズ実施の主目的は、前述のように受講生たちにこれから始まる「心理学概論」に対する興味を抱かせ、この講義への参加の動機づけを高めるところにある。そのため、ここで使用している40の短文の中には、その表現に厳密さを欠くものも含まれており、厳密にみれば論争中のテーマも含まれている。また、40の短文はすべての心理学領域をカバーしておらず、また短文の数は各領域で必ずしも同数ではなく、数に偏りがあること等もあらかじめ記しておきたい。使用している短文40問全文は本論文中の結果の表2に示した。ちなみに正解はすべて×になっている。

2.2 対象者及び実施時期

2.2.1 文教大学人間科学部人間科学科新生

このテストの対象者のうち、文教大学人間科学部人間科学科新生 (以下「文教大学新生」と略記) の場合は、2003年度春学期半期の人間科学部開設科目「心理学概論」の第一回目講義に出席した受講生251名である。性別内訳は男子学生86名女子学生165名であった。本年度の実施日は2003年4月17日であった。

厳密に言うと、この「心理学概論」を受講している学生は、必ずしも人間科学部人間科学科新生だけではない。少数ながら2年生以上の学生も受講している。1年生時に受講しなかった者、再履修の者、3年次への編入生、他学科聴講生、非正規受講生 (いわゆる「もぐり」である) 等である。ただ、その人数は少数であり、受講生の圧倒的多数は人間科学科新生の1年生であった。2003年度には1年生以外の受講生は19名おり、251名の受講生の7.6%であった。つまり受講生の92.4%は新入の人間科学科1年生ということになる。

2. A大学学生

A大学での本クイズの実施日は2003年4月12日であった。A大学の対象者は、教養学部にも所属する男性4名女性28名の合計32名で、筆者のひとりである木島の担当する面接授業の「心理学実験・実習」の第一回目に参加した受講生であった。A大学では特に学年指定を設けていない。対象者の年齢は66歳から23歳の範囲にあり、平均年齢は40.9歳(標準偏差=10.23歳)であった。その多くは社会人で最終学歴は高校・高等専門学校・短期大学・大学等多岐にわたっていた。また、対象になった32名の学生のうち23名は、それまでにすでに1科目から5科目の心理学関係科目を受講済みであった。彼らが受講済みと報告した心理学関連科目は、心理学(共通科目)・心理学初歩・心理学入門・心理学概論・教育心理学概論・心理学史・心理測定法・知覚心理学・認知心理学・発達心理学・乳幼児心理学・青年心理学・老年心理学・老年期の病理と心理・学習心理学・教育心理学・人格心理学・臨床心理学・カウンセリング概論・社会心理学・教育心理学実習・臨床心理学実験・実習などの科目であった。

3. 手続き

3.1. 文教大学新入生

文教大学新入生の場合は、第一回目の講義を始める前に短文の印刷された用紙を全員に配布し、その後、丹治が一項目ずつ読み上げ、一斉に受講生が○か×で回答するスタイルをとった。全40問回答終了後、その場で受講生たちに正解を告げ、40問の項目のうち任意の何項目かについての解説を行った。それが終わると、回答済みテストを回収し、その後個別に点数をつけて数週間後の授業時に全体結果とともに各受講生に返却した。

3.2. A大学学生

A大学の場合は、木島が「心理学実験・実習」の第一回目授業で、まず心理学の研究方

法と、その中での実験法の特徴について簡単に講義した後、本クイズを実施した。実施手続きは文教大学新入生の場合と同じで、個人結果は一週間後の授業で返却した。

4. 結果処理法

1. まず、現代心理学に関する正しい知識がどの程度浸透しているのかを概観するために、各個人の正答数を求め受講生全体の得点分布を求めた。また、比較のためにA大学学生の場合も同様の処理を行った。

2. また、同データについて、文教大学新入生たちの間に浸透している知識はどのような内容の知識なのかを概観するために、短文1項目ずつの全体の誤答率を求め、誤答率の高かった項目、誤答率の低かった項目の内容について検討を行った。比較のためにA大学学生の場合も同様の処理を行った。

5. 結果及び考察

5.1. 2003年度文教大学新入生とA大学学生の得点比較

表1に、文教大学新入生とA大学学生の得点の基礎統計量を示した。短文は40項目であったが、表1では100点満点換算で表示した。

人間科学部では心理学関連科目が多く開設されており、人間科学科学生で心理学を専門に学ぶことを希望して本学科に入学してくる学生も多い。それにもかかわらず、新入生段階では、全体的にみると40問の設問に対してほぼ半数の設問に正解を示すにとどまり、平均得点は100点満点換算で50点強の得点であった。この得点は、A大学学生の平均得点の64点にくらべ低めの得点であった。両群の平均得点間でt検定を行ってみたところ、両群間で有意な得点差を確認できた($t=4.351, df=281, p<0.01$)。 「方法」で述べたように、文教大学新入生にくらべA大学学生は、年齢も学歴も比較的高く、さらにそれまでに何科目かの心理学関連科目を受講済みの学生たちであ

表1．文教大学新入生とA大学学生の得点分布及び基礎統計値

得点範囲 (100点満点)	文教大学(251名) 比率(実人数)	A大学(32名) 比率(実人数)
0 - 9	0.0% (0名)	0.0% (0名)
10 - 19	0.0 (0)	0.0 (0)
20 - 29	0.0 (0)	0.0 (0)
30 - 39	0.7 (2)	0.0 (0)
40 - 49	14.3 (36)	6.3 (2)
50 - 59	32.7 (82)	12.5 (4)
60 - 69	32.3 (81)	15.6 (5)
70 - 79	13.5 (34)	37.5 (12)
80 - 89	5.6 (14)	18.8 (6)
90 - 99	0.7 (2)	9.4 (3)
100	0.0 (0)	0.0 (0)
平均点	52.7点	64.0点
標準偏差	11.0点	14.1点
最高得点	90点	90点
最低得点	25点	35点
平均正答数	21.1問	25.6問

る。文教大学新入生とA大学学生の得点差は、A大学学生の社会生活経験の長さ、学歴の高さ、また、それまでに受講してきた何科目かの心理学関連科目によって得た知識等によってもたらされたものと推測するのが妥当なのであろう。

2．2003年度文教大学新入生とA大学学生の項目別誤答率の比較

表2に、文教大学新入生の誤答率（誤答人数）を誤答率の高かった短文順に示した。また、同短文に対するA大学学生の誤答率（誤答人数）を並列で示した。両群の誤答率の違いを検討するために両群の誤答率間で検定を行ってみた。

表中短文末の【**】は短文内容が含まれる心理学領域を示している。また、注1の標記のある(31)の短文中では以前は「厚生省」という名称を用いていたが、省庁再編以降「厚生労働省」という名称を用いている。また、注2の標記のある(19)の短文では以前は「精神分裂病」という名称を用いていたが、日本精神神経学会による「精神分裂病」から「統合失調症」への名称変更以降、短文の中では「統合失調症（精神分裂病）」という表記を用いている。

なお、表中の実線は、文教大学新入生の誤答率の高かった上位10項目および誤答率の低かった下位10項目の境界を示す。

表2．文教大学新入生とA大学学生の各短文に対する誤答率（誤答人数）の比較

項目番号	質 問 短 文	文教大学(251名)	A大学(32名)	χ ² 値	有意確率
(06)	目の見えない人は、目のみえる人とは異なった鋭敏な触感覚を持っている。【感覚・知覚】	87.3%(219名)	28.1%(9名)	63.36	**
(33)	子供は大人よりずっと容易に暗記することができる。【記憶】	86.5%(217名)	37.5%(12名)	44.05	**
(37)	睡眠は人間の生存に必要不可欠のものであり、一日20分程度の睡眠で何カ月も生活することは不可能である。【生理心理】	86.5%(217名)	81.2%(26名)	0.63	ns
(13)	天才と狂気は紙一重である。【性格・知能】	82.1%(212名)	34.4%(11名)	42.61	**
(27)	人が夜8時間眠ったとすると、その時間のほとんどは夢を見ているが、朝目覚めると同時に一部の内容を残してそのほとんどを忘れてしまう。【生理心理】	79.4%(199名)	93.7%(30名)	3.84	*
(25)	催眠下では、それまで決してできなかったような力技（ちからわざ）を行うことができる。【臨床心理】	79.4%(199名)	46.9%(15名)	16.16	**
(39)	子供の知能指数と学業成績とはほとんど相関しない。【性格・知能】	73.0%(183名)	40.6%(13名)	13.89	**

(04)	赤ん坊にとって幸福なことに、人間の女性は元来強い母性本能を持っている。【発達心理】	72.6%(182名)	31.2%(10名)	22.14	**
(12)	記憶は脳内の貯蔵庫になぞらえられる。我々は資料をその中に蓄え、そして必要な時にそこから引き出すことができる。場合によってはその『金庫』から何かが紛失することがあり、それが忘却である。【記憶】	71.0%(178名)	46.9%(15名)	7.56	**
(26)	訓練された精神科医や心理学者は、正常な人間が精神病患者を装っても数回の面接を行えばそれを簡単に見破ってしまう。【臨床心理】	67.5%(169名)	46.9%(15名)	5.22	*
(23)	単純でつまらないアルバイトをした後、高いバイト料を貰った人のほうが、安いバイト料を貰った人よりもその作業を高く評価する。【社会心理】	60.7%(152名)	25.0%(8名)	14.50	**
(31)	臨床心理学者として開業するためには、日本では厚生労働省の実施する国家試験に合格しなければならない。(注1) 【臨床心理】	60.3%(151名)	37.5%(12名)	5.96	*
(24)	精神科医は精神分析を用いる医師として規定されている。【臨床心理】	60.3%(151名)	15.6%(5名)	22.75	**
(15)	より強く動機づけられるほど、複雑な問題を巧みに解決できるだろう。【動機づけ】	58.7%(147名)	40.6%(13名)	3.71	ns
(21)	罪もない人に『450Vの電気ショック(100Vで人が死ぬことがある)を送れ』という命令には、多くのひとは従わないであろう。【社会心理】	56.0%(140名)	40.6%(13名)	2.62	ns
(40)	幻覚や夢、あるいは病的な状態にある場合をのぞいて、正常な心理状態下では物理的に存在しないものは眼には見えない。【感覚・知覚】	50.4%(127名)	53.1%(17名)	0.07	ns
(34)	個人である決定を下すよりは、集団で討議して決定を下すほうが、過激な結論になりにくい。【社会心理】	50.0%(126名)	31.2%(10名)	4.08	*
(03)	『心の研究』という言葉は、心理学を定義した最も良い短い定義である。【心理学全般】	49.2%(123名)	28.1%(9名)	4.97	*
(18)	平均的な赤ん坊に適切な訓練を行えば、普通より2か月はやく歩けるようになる。【発達心理】	48.8%(122名)	21.9%(7名)	8.17	**
(30)	教師の生徒に対する期待と、その生徒の学力とは無関係である。【教育心理】	46.8%(117名)	25.0%(8名)	5.37	*
(11)	人間の脳の記憶情報の貯蔵量は、約五千万項目程度と言われている。【記憶】	46.4%(116名)	31.2%(10名)	2.57	ns
(05)	多分、人間の闘争本能が戦争の根本的な原因なのであろう。【社会心理】	43.3%(109名)	31.2%(10名)	1.72	ns
(01)	生理学者は肉体を研究する。心理学者は心を研究する。【心理学全般】	42.9%(108名)	34.4%(11名)	0.87	ns
(35)	最近の睡眠科学の進歩は目覚ましく、睡眠中に測定される脳波や他の生理反応を分析することによって、夢の内容のかなりの部分がわかるようになってきている。【生理心理】	40.9%(103名)	34.4%(11名)	0.52	ns

自由研究

(28)	念動（サイキネーシス）や未来予知に関してはまだ不明の部分があるが、テレパシーに関しては程度の差はあれ、人間に生物学的に備わっている能力であり、訓練次第でその能力を伸ばすことができることが科学的に明らかにされている。【超心理】.....	39.3%(99名)	59.4%(19名)	4.63	*
(20)	何か助けが必要なとき、周囲に一人しか他人がいない場合よりも、沢山の他人がいたほうが援助される可能性は高くなる。【社会心理】.....	38.5%(97名)	46.9%(15名)	0.80	ns
(10)	心理学とは、フロイトの創始した精神分析学とほぼおなじみのものである。【心理学全般】.....	35.3%(87名)	6.2%(2名)	10.62	*
(07)	人間の視知覚機能は、光学機械などとは比べようもなく精緻であることが実験的に明らかにされており、可視範囲であれば極めて正確に外界をとらえることができる。【感覚・知覚】.....	35.3%(87名)	21.9%(7名)	2.09	ns
(38)	人の大脳は右脳と左脳に分かれてある程度の機能分担をしているが、片方の脳だけ起きていて、もう片方の脳は眠ってしまうなどということはあり得ない。【生理心理】.....	28.2%(71名)	37.5%(12名)	1.16	ns
(19)	統合失調症（精神分裂病）とは性格の分裂した人のことをいう。（注2）【臨床心理】.....	27.8%(70名)	0.0%(0名)	11.85	**
(09)	子供に何かを学ばせる場合、できた時に報酬を与えることと、できなかった時に罰を与えることは、子供の学習に同じくらいの効果がある。【学習心理】.....	27.4%(69名)	15.6%(5名)	2.06	ns
(02)	心理学は一つに体系化された科学である。【心理学全般】.....	27.0%(68名)	9.4%(3名)	4.73	*
(36)	上下が逆さに見えるメガネを長期間かけ続けても、我々が知覚する外界は逆転したままであるが、日常行動は逆転メガネをかける前とほぼ同じ程度にスムーズになる。【感覚・知覚】.....	25.0%(63名)	21.9%(7名)	0.15	ns
(16)	血液型（A・B・AB・O）と性格の間にはある種の関連があり、このことは心理学的に実証されたと言ってよい。【性格・知能】.....	23.4%(59名)	12.5%(4名)	1.98	ns
(29)	睡眠中に生じる『金縛り現象』は、心理学では超常現象のひとつとして研究されている。【超心理】.....	22.6%(57名)	21.9%(7名)	0.01	ns
(22)	我々はある事柄に対してまず『意見』を持ち、次に『態度』を形成し、それに従って『行動』するのが普通であり、その逆は通常あり得ない。【社会心理】.....	19.0%(48名)	12.5%(4名)	0.83	ns
(08)	現実の場面ではなく、テレビなどで凶暴なシーンを見るだけでは、子供に余り悪い影響を与えない。【学習心理】.....	11.5%(29名)	21.9%(7名)	2.72	ns
(17)	子供は善悪の感覚を持って生まれてくる。【発達心理】.....	9.1%(23名)	9.4%(3名)	0.00	ns
(14)	知能検査は人間の知能を正確にはかることができる。【性格・知能】.....	5.6%(14名)	3.1%(1名)	0.34	ns
(32)	心理学を学ぶと他人の心が容易に分かるようになる。【心理学全般】.....	5.6%(14名)	6.6%(2名)	0.02	ns

* p < 0.05 ** p < 0.01

文教大学新入生で誤答率の高かった上位10項目のうちの8項目で、A大学学生の誤答率は大幅に低くなっていることが確認できた。文教大学新入生の多くが持っているこうした誤った心理学の信念が、A大学学生では補正されている可能性がうかがえた。ただ、こうした補正は、A大学学生がそれまでに受講してきた何科目かの心理学関連科目によって得た知識のみに拠ると断定することはできない。こうした補正は、彼らが受けた教育によって得た心理学知識に拠るものも含まれるのであろうし、また、彼らの社会生活経験の長さにも拠るものも含まれるのであろう。あるいは、そうした知識と経験の複合によってもたらされたものも含まれるのかもしれない。ただ、いずれにしても、こうした比較結果は、文教大学新入生の持つ誤った心理学的な信念は、彼らがこれから受ける心理学教育や彼らの今後の経験によって十分補正されていく可能性を示唆するものと考えてよいのであろう。

文教大学新入生で誤答率の高かった上位10項目の短文群（誤答率87.3%～67.5%）では、それらの短文内容が含まれる心理学の各領域と高い誤答率との関係は必ずしも明確ではなかった。そこで各項目の内容に注目してみると、二つの特徴があることがうかがえた。

その第一は、A大学学生の誤答率との差が極めて大きかった項目群が存在した点である。そうした(06)(33)(13)(04)などの短文群は、科学的ではない通俗的な表現で記述された短文であり、また、内容的にも分かりやすく、世間受けのする誤った心理学の信念を導きやすい短文群と考えることができる。ただ、これらの世間受けのする誤った心理学の信念については、A大学学生の誤答率の結果との比較から、年齢、社会経験あるいは他の学問の学習によってある程度補正されうる知識と考えるとよいのであろう。

また、その第二は、文教大学新入生で誤答率の高かった上位10項目の短文群のうち、A

大学学生でも高い誤答率を示した項目群が存在したという点である。(37)の短文はA大学学生で81.2%と高い誤答率を示し、文教大学新入生の86.5%という誤答率との間に有意な差は認められなかった。また、(27)の短文の場合でみると、A大学学生は93.7%という極めて高い誤答率を示し、文教大学新入生の79.4%を有意に上回る誤答率であった。この2項目は、心理学領域でみれば生理心理領域に属する短文であり、単に社会生活経験の長さだけで補正されるような内容ではなく、個別領域の心理学を専門的に学ばなければ補正しえない内容の短文と言えるのかもしれない。

また、A大学学生の場合でも、この上位10項目の短文群の中で誤答率が40%を越える項目が上記2項目を含め6項目含まれていた。このことは、これらの信念が社会生活経験の長さだけでは、また、数科目の心理学関連科目の受講だけでは補正されにくい信念であり、補正のためにはより専門的な心理学教育が必要になる内容と思われた。

文教大学新入生で誤答率の低かった下位10項目の短文群（誤答率27.4%～5.6%）については、A大学学生も、こうした下位10項目のうち9項目で有意な差の見られない低い誤答率を示していたことも確認できた。現段階では誤りの少なかった短文群に共通する明確な特徴を見いだすことはできなかったが、文教大学新入生の間にも、こうした短文群については、比較的正しい知識が浸透していることを示唆しているものと言えよう。

．今後の分析に向けて

今回の結果は、探索的な分析ではあったが、文教大学新入生の持つ心理学知識の程度とその内容をある程度知ることができた。また、社会人の少ない本学の新入生に対して力をいれるべき心理学教育についてもある程度の示唆を得ることができた。文教大学新入生の持

自由研究

つ心理学知識の構造等についての分析をさらに深めるために、以下に本データの今後の分析予定について述べてみたい。

大学新入生たちのこうした心理学知識に対する回答の反応パターンに共通性があるかどうかをさらに検討するために、今後、コレスポネンス分析等の多変量解析的分析も行う予定にしている。

また、筆者のひとりである山下は、本クイズを他大学理工学部学生たちに実施し、すでに大量のデータを蓄積している。人文科学志向の人間科学部学生と自然科学志向や工学志向の理工学部学生の結果の比較によって、人間科学部学生の心理学知識の特徴をさらに明らかにしてみたい。

また、筆者の一人である丹治は、冒頭で述べたように本学人間科学部人間科学科新入生に対して、過去6年間にわたって「心理学概論」を担当しており、6年間分の同様のデータの蓄積がある。人間科学部人間科学科新入生の持つ心理学知識が、過去6年間でどのよ

うに変化してきているのか、あるいは変化していないのか、今後検討してみたいと考えている。

．文献

- 1) 稲葉智子 1991 大学生の心理学知識に関する調査研究 1990年度文教大学人間科学部卒業論文(未公開)
- 2) McKeachie, W.J. 1960 Changes in scores on the northwestern misconceptions test in six elementary psychology courses. *Journal of Educational Psychology*, 51, 240-244.
- 3) Vaughan, E. 1977 Misconceptions about psychology among introductory psychology students. *Teaching of psychology*, 4, 138-141.
- 4) ジンバルドー, P. G. 古畑和孝・平井久(監訳) 1983 ジンバルドー: 現代心理学 サイエンス社 (Zimbardo, P.G. 1980 *Essentials of psychology and life*. The 10th edition. Illinois : Scott Foresman and Company)